

異国で学び、生きる

城東町補習教室の25年

支えられた日々、今は支える側

③ 社会の中で

師走の夕方5時半は、もう真っ暗だ。姫路市内の配管部品製造工場での仕事を終え、グエン・タン・コンさん(34)は同市城東町清水Ⅱが帰宅した。途端に子どもたちがおなかや背中に飛びつく。疲れた表情がパッと明るくなった。

ベトナム・ハロン市で生まれ、12歳の時、母の再婚を機に来日。城東小の6年生に編入した。

同級生となじまず、日本語は上達しなかった。日本語指導の担当だった金川香雪さん(67)の勧めで、城東町補習教室に通うように。同じベトナム人の友人たちと、アニメや映画の感想を語り合った。いつしかそこが、心地よい居場所になっていった。

だが中学生になると、状況はさらに悪化した。「臭い飯を持ってくんない」。魚醤を使ったベトナム料理の弁当を同級生にとがめられてからは、金川さんのいる城東小で毎日過ごした。

城東町補習教室の児童に語りかけるグエン・ゴック・イーニイさん(姫路市城東町)

二つの言語、強みに

卒業と同時に就職。通勤に使う車の運転免許試験は当時、ベトナム語で受けられなかった。補習教室などで勉強し、5回以上落ちた末に何とか合格できた。

「高校を出たらもういい仕事に就ける」。日本語に自信がついた18歳の頃、高校受験を決意した。城東町補習教室で小学生レベルから復習し、飾磨工業高校の多部制に進学した。

卒業後、別の企業に再就職した。その後同郷の女性と結婚し、1男1女に恵まれた。子どもたちも今、補習教室に通う。「金川さんなら安心して任せられ

る。昔の自分と同じように、楽しい時間を過ごしてほしい」と成長を期待する。

◆ 姫路市内の病院で看護師として働くグエン・ゴック・イーニイさん(24)は同市四郷町も子どもの頃、城東町補習教室に通った一人だ。9歳の時、両親と一緒に日本にやって来た。

看護師を志したのは小学3年生の時。母の病院に同行したことがきっかけだった。「ベトナム語も話せる看護師がいたら助かるのに」。補習教室で勉強し、看護専門学校に合格した。夢を諦めかけたこともある。「塩分控えめにしてくださいませしょう」。患者にかけた何げない一言が問題になった。「治療方針を何も説明していないのに、押しつけるような言い方をしたらダメ」。指導員から意識の低さを指摘され、退学を考えるほど思い詰めた。

「絶対に辞めたらあかん」。金川さんや友人たちに励まされて思い直し、一昨年春、看護師になった。日本語が話せないベトナム人の患者を支えてお礼を言われるたび、胸が温かくなる。4月には大阪に移り、二つの言語を話せる強みを生かせる、新たな道を模索する。「教室は、親にも言えないことを相談できる場所。姫路を離れてもつながりは切れない」(成 将希)



仕事を終えて帰宅し、子どもたちと遊ぶグエン・タン・コンさん(姫路市城東町清水撮影・辰巳直之)

「絶対に辞めたらあかん」(成 将希)